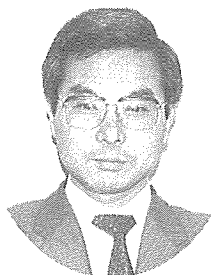


## 東北地質調査業協会に期待する

東北地方建設局 菅原 政一  
技術調整管理官



地質調査に携わる技術者は、大局を誤まらない判断が常に要求されるためであろうが、事象を捉える時間と空間のスケールが極めて大きいように思われる。

国民生活に直接関連する重要な社会資本整備をあずかる土木の世界でも、例えばダム等の大規模な構造物の耐用年数はせいぜい100年のオーダーであるのに対し、数万年、数百万年いや数億年も前に想いを回らせる時間的スケールの大きさは他にあまり類をみないであろう。

また空間的にも問題の対象地域のみならず広域的な地形、地質情報をもとにその地域の地盤の生因や性状を把握するといった周辺の、あるいは全体の中の位置付けを明確にする、つまり大局の捉え方に実にうまいと感心する。

一方このようなマクロの情報をもとに極めて精緻に計画が立てられ、調査された点（ボーリング等）と線（物探等）の情報を細かく分析し、深い洞察力と豊かな想像力によって地下や地盤の状況を鮮やかに正確に表現し、我々土木技術者に貴重な情報として提供してくれる頼もしい存在である。

私事ながら、いつ、誰に戴いたのか忘れたが、将棋の升田名人の色紙がある。それには「着眼大局着手小局」と認められているが、多分、将棋の運びも、場当りの発想や、その場凌ぎの考えでは、大局を見誤ることになるので、それを戒めてのことであろうが、地質調査の本質も衝いているのではなかろうか、更にもっと言えば、地質調査のみならず物事を遂行するうえで心しなければならぬ、普遍性をもった箴言であるような気がする。

ともあれ地質調査業は遠い昔に想いを馳せる夢多く、ロマンに満ちた男の世界であり、技術者冥利に尽きる仕事を担っていることになるわけであるが、一方では、建設関連産業が抱える深刻な問題に直面している現実がある。それは、若年労働者の確保であり、経営体としての企業体質の強化が大きな課題になっているのではないかと思われる。

地質調査業は、建設業と同様単品受注産業としての特性から受注量の安定的確保が難し

い状況にある。とりわけ東北地方にあっては、公共事業の依存度（約80%）が大きいだけに、業務の平準化については、発注者としての行政側も大きな課題としてとらえる必要があると考えている。しかしながら制度等の制約から建設工事の平準化よりもむしろ問題処理が難しい面もあるが、可能なものから一つ一つ解決してゆきたい。また平準化とあわせて工期の設定についてもより一層の適正化を図ることも急務である。この平準化と適正な工期の設定が唯一無二の切札ではないにしろ、企業体質の強化や技術者の処遇改善、労働条件の改善に果たす効果も大きく、若年労働者確保のための条件整備に大きく寄与することになると思われる。

さらに地質調査業のイメージアップについて言えば建設産業全体がそうであるように社会一般の認識ないしは理解を深めるための業界としての自助努力も必要ではなからうか。因に建設業界では勿論のこと、測量業界でも昨年6月3日を「測量の日」として制定し、測量の必要性、重要性を広く国民に訴えかけるキャンペーンを展開しており、地質調査業においても英知を集めた独自の取組みが望まれる。

東北地方は、第四次全国総合開発計画においても、日本の将来の発展にとって重要な地域として位置付けられており、高速交通体系の整備や、水資源の開発、国土保全施設の整備等も進んできたこともあり、工場の立地が活発化するなど発展の兆しが見えてきたが、これを確固たるものにするとともに、21世紀に向けて、活力と潤いに満ちた東北地方の創出のためにも立ち遅れている社会資本整備をより一層進めなければならないものと思われ、地質調査業の果たす役割は益々大きなものがあるが、近年における社会資本整備は、国民の複雑多様なニーズに応えることが要求されており、それだけに地質調査業についても専門領域のみならず周辺分野とのいわゆる業際問題も含めた技術力の涵養が要請されることになるので、東北地質調査業協会が業界の先駆的役割を果たす自覚の下になお一層研鑽を積み、真に信頼されるパートナーとして発展して欲しいと思います。

